

資料館づくりへ着手 町が施設を無償譲渡



足場を組み立てて工事に着手した旧看護婦宿舍

深澤晟雄の会では沢内病院前の旧看護婦宿舍を改造して深澤晟雄資料館にしたいと、西和賀町と町議会に要望書を提出するなど資料館建設の環境整備に努めてきました。

事業費の財源として日本宝くじ協会の助成が決まったことで、町では本会に施設の無償譲渡と敷地の無償貸与を決め、6月議会に提案、可決されました。

これを受けて町との施設譲渡契約など所要の手続きと合わせて、資料館建設工事の準備も急ピッチで進め、湯田のユウ建築事務所に設計を依頼し、7月18日に入札。最低価格を提示した太田の米沢工務所と工事請負契約を締結し、着工しました。

本会は昨年6月発足なので一周年の記念すべき事業の着手となりました。工期は9月30日となっています。

資料提供
あいつく

深澤家から多数の遺品

沢内ゆかりの方々からも

資料館に収めて欲しいと、各方面から生命行政資料や深澤村長の遺品など貴重な資料が寄せられています。

深澤貞夫氏から深澤晟雄・ミキ夫妻の遺品の数々が寄せられ、資料館の中核となる価値ある資料が揃いました。

また、元沢内病院長で仙台市在住の加藤邦夫先生は、昭和40年代の西和賀保健調査会の資料や当時8ミリフィルムで撮影した深澤晟雄

胸像除幕式の映像記録など、貴重な資料を寄せています。

一関市在住の作家・及川和男氏からは「村長ありき」「生命村長・深澤晟雄物語」など氏の著作による出版本5冊を寄贈されました。

昭和43年制作の記録映画『自分たちで生命を守った村』が社会教育映画部門で銀賞に輝いた副賞のトロフィーが、さいたま市在住で当時の制作会社社長夫人・森谷澄子氏から寄せられています。

「村長ありき」 復刊発売中！



絶版となっていた深澤村長の生涯を描いた及川和男著「村長ありき」が、れんが書房新社から復刊され、全国の書店で発売中です。「お盆帰省者のお土産に」という声に応じて深澤晟雄の会でも取り扱っています。購入希望者は下記事務局までご連絡下さい。また、全国の知人友人にも紹介してあげてください。(一冊 1600円)

深澤晟雄さんという人

前郷 佐々木 孝道 (52歳)

深澤晟雄との思い出やエピソード、氏の業績や生命行
政について思うことなど、皆さんの思いをお聞かせ下さ
い。原稿が入り次第「深澤晟雄を語る」と題して掲載し、
応募がないときは「深澤語録を訪ねて」を掲載します。



「深澤晟雄を語る」第1回は本会の佐々木副理事長です。自ら経営する自動車修理工場の敷地内に自費を投じて深澤晟雄への思いを凝縮した大看板を立てました。その熱き思いを原稿にしてくれました。(一部割愛)

「毎日が崖っぷち」

私が深澤晟雄さんを知ったのは中学生の頃で、音楽の授業で「深澤晟雄を讃える歌」を歌いました。

その後、深澤村長時代の助役であった佐々木吉男さんと知り合い、同じ部落だったので、毎朝6時からお茶を一緒に飲むようになり、深澤村長時代のことをいろいろ教わりました。特に言うていたのは、晟雄さん曰く「俺とお前はいつも断崖絶壁を歩いている。生きるか死ぬか、毎日が崖っぷちだ!」と言うことでした。貧困、多病多死、豪雪を乗り越えるために、当時いかに張りつめた毎日を過ごしていたか想像できます。そして、深澤村長の強力なリーダーシップのもと、村民が団結して雪を克服、乳児と老人の医療費無料化、乳児死亡率ゼロも全国に先駆けて達成します。そして晟雄さんは「残るは産業と教育だ」と言い残して昭和

上映会の「案内」

9月上旬までの「いのちの作法」上映会は、東京大学、日本医労連など対象者限定の上映が多く、一般対象では次のとおり。8月9日13時・19時/大分県九重町・九重文化センター大ホール ▼9月4日14時・18時30分/矢巾町・田園ホール ▼9月6日10時/千葉県松戸市民劇場

「沢内村の慈父」

6月21日、元沢内病院長の加藤邦夫先生とお会いすることができました。その時先生に「深澤晟雄さんという人は一言で言えばどんな人でしたか」と尋ねると、少し考えてから「仏さま」と言われました。

現在の沢内病院の基礎を築かれた加藤先生がいかに晟雄さんに惚れ込んだかわかります。ある本で加藤先生は深澤晟雄さんのプロフィールを「沢内村の慈父」と題して次のように紹介しています。

「慈愛のまなざし、長い雄弁な挨拶、話し合いにおける演出の名人芸、理想に直結する結論の引き出しのうまさ、村づくりのビジョンに向かって組み立てられた構想の各部分に、すべての人と物を巧みに組み入れる指導者・教育者……」

この殺伐した世の中、生命尊重を第一にかかげ、弱者指向共同体をめざした深澤晟雄さんこそ、今、もっとも必要とされる政治家ではないでしょうか。

今こそ、深澤晟雄さんたちが壁に立ち向かっていったように、町民一致団結して困難に突き進んで行くことだと思えます。